

近代日本は一枚岩ではない

来年は「明治150年」である。といっても大政奉還は慶応3（1867）年だから、今年も実質的には150年というサイクルで、近代日本を振り返ってもいい。

150年にあたって今年から来年にかけて、その種の書が何冊か刊行されるだろう。いやその他のメディアでもこの区切りを機に明治・大正・昭和、そして平成を俯瞰（ふかん）する企画が増えるはずだ。単に150年を編年風になぞったところでまったく意味はないが、実は近代日本史を多種多様な見方で検証する機会になりうるのではないか。

たとえば、近代日本は薩摩・長州の両藩を軸とした国家であり、こうした権力に抗した勢力を改めて検証する必要もあろう。会津藩をはじめとして、賊藩とされた人たちの生き方、西南戦争での薩摩藩要人たちの屈折した心情、明治10年代の自由民権活動家たちの先進性、信仰に生きた人たちの精神構造、初期社会主義者の素朴な人間観、非戦・反戦を説いた知識人など、明治時代を取り上げただけでも多くの人間模様を抽出することができる。

大正や昭和、そして平成にもそれぞれの時代の人間模様があつたはずだ。明治政府は結果的に西欧帝国主義の道を遅ればせながら歩んだのだが、それ以外にも歩む道はあつたのか、あつたとすればどのような道か、など改めて具体的に歴史に問うてみるのもいい。

私自身のことになるが、私は北海道生まれの北海道育ちで、18歳までは大半を札幌で過ごした。その後北海道を離れてはいるが、それでも年に何度か札幌に赴き、この地への思いを強くしている。かつて私が住んでいたころの札幌は、人口が30万人前後であり、北海道の人口500万人のうち1割にも達していなかった。それが今や北海道の人口が550万で、札幌は200万人都市になろうかといった勢いだ。このいびつさは、近代日本の発展が、ゆがみを伴っていたとの証明になるのではないか。

有り体に言えば、私は明治150年を機に、「北海道学」を創設しようと主張している。こうした意向を持つ人々も道内には多く、そのような人たちと連携しながら、北海道の歴史・文化・経済などを貫く1本の芯を確立すべきだと考えているのである。むろんこれは近年の赤坂憲雄氏らの「東北学」を意識しながら、あるいは北海道開拓時に札幌農学校で学んだ新渡戸稲造の「地方学（じかたがく）」の理論をさらに発展させようとの思惑を秘めている。

いうまでもなく北海道はアメリカと同様に「人工国家」である。アイヌ民族の人々が住んでいる地に、和人が入って行って協力や衝突を繰り返した歴史がある。明治2（1869）年に北海道開拓使が設けられ、屯田兵の入植が続く。

この構想は職を失った旧士族の救済を目的にと西郷隆盛が考えたとの説もあるが、しかし屯田兵入植は必ずしも成功とはいえなかった。ましてや「民」の立場での入植（帯広の依田勉三らの晩成社など）の苦勞は筆舌に尽くしがたいものがあつた。

北海道開拓使の廃止（明治15<82>年）のあと、伊藤博文は若き官僚の金子堅太郎に実情調査を命じている。明治18（85）年に提出されたこの報告書は、屯田兵入植の失敗（成功は2例・旧尾張藩の八雲と旧伊達藩の伊達）を認め、新たな提案も行っている。翌年に北海道庁が設置されて、新たな方針で北海道開拓は続いている。もとよりこうした施策は帝国主義的な側面があつたのも事実であつた。同時に中央政府に依存する一方で、道民兵士は軍事的に過酷な地に送られた。

北海道学には、こうした官への屈折した心理と民間側のエネルギーを正当に見つめる視点が必要になっている。初期の明治政府に抗した人たちが、北海道から抵抗したり、あるいは北海道の地で名を変えて、歴史の動きを見つめたりしていたケースとて少なくない。

そのような史実を改めて整理し、次代に残すという労は今をおいてないように思う。

文化人類学の故祖父江孝男の書「県民性」には、日本各地の県民性を調べるとそこには旧藩の圧力

が感じられるのに、北海道にはそれがないと記述されている。とくに女性の性格は「内地」とまったく異なって、「極めてハキハキしていて物怖（ものお）じしない」ともいう。各種調査でも北海道人は「開放的な人間関係」「個人主義」といった特徴があるそうだ。

これは何を意味しているのか。約270年間の江戸時代、各藩の桎梏（しっこく）から解放された様が見て取れるのだ。

実は北海道学の骨格はこの点にあり、明治150年という時間の中で、この性格がどのように変遷していったのか、それを確かめる責務があるように思う。明治150年、近代日本を一枚岩のごとく語る愚は犯すべきではないと断じたい。